

第十五編 ポルトガル海洋帝国の野望

(ヴァスコ＝ダ＝ガマと「インド航路発見」そのⅡ)

ロンドン大学のローランド・オリバーという学者がある本の序文に次の記述を残している。「16世紀から19世紀にかけて、欧州の人々は世界の各地にあふれ出てゆき、植民化された殆どの土地において、原住民の人口は減少した。アメリカのインディアンやオーストラリアの原住民は、自分たちの住む大陸を十分に開発しておらず、また数も少なかったため、侵入者達が住み着き、彼等よりずっと早い速度で増えてゆくのを阻止する事ができなかった。2－3世紀を経ずして、この2大陸の原住民の人口は激減し、少数民族となってしまった。アフリカは、これと同じ事態に直面しながらも生き残った。欧州の移民が自給自足の社会を作り上げる事ができたのは、狩猟民や食料を求めて放浪する人々に残されていた唯一の未開拓の土地、大陸の南端だけであった。その他の土地では、アフリカ人は数において遙かに勝り、環境を十分に支配していたので、それに太刀打ちすることはとてもできなかった。アフリカ人は19世紀末から20世紀初頭にかけて、僅かの間、外国の支配下に置かれはしたが、数において圧倒的に勝り、彼等の文化も破壊されることはなかった」と記している。そうかもしれない。アフリカ人の人口は現在でも8億人を超えているといわれるし、奴隷としてアメリカ大陸に売られたアフリカ人の子孫は、アメリカの力としてあらゆる世界に主張をなしている。しかし、アフリカの文化に与えた奴隷狩りの影響は、やはり大きな負の原罪として、欧米人は認識するべきだろう。

奴隷貿易は16世紀から始まっている。この奴隷貿易によって、イギリスのリヴァプール、マンチェスターは繁栄したといわれている。リヴァプールは奴隷船の建造で活気づき、マンチェスターはアフリカの人々に売る綿織物の生産にあけくれ、周辺都市では奴隷の「手かせ」や「足かせ」の生産に追われたという。300年以上続いた奴隷貿易は、6000万人近い人々をアフリカ大陸から連れ去っている。多くは奴隷商人によって取引された奴隷だが、その奴隷を供給したのはアフリカ人の国家であり、奴隷は彼等の捕虜であった。奴隷商人は鉄砲をその国に売りつけ、奴隷を引き取った。対立する国よりも多くの火器を手に入れなければ、自国の国民の安全を確保できなくなっていたアフリカの国々は、アフリカ人同士の戦いを広げ、奴隷狩りをせざるをえなくなっていた。農民は土地を捨てて奥地に逃げ込み、若い男女は奴隷狩りの対象にされた。現実にアフリカの文化を残しているといえる国がどれだけあるだろうか。それほど奴隷貿易の傷跡は深い。

アフリカ東部沿岸に、アフリカ文化を基調としながらも、アラブ的・インド的な要素を多分に含んだスワヒリ（アフロアラビア）文化が誕生していた。彼等の住むモンバサやマリンデイやラムといった集落はアラビアやインドとの貿易で繁栄し、10世紀から13世

紀にはモスクを中心に石造りの家が立ち並ぶ都市へと発展した。このスワヒリ諸都市も、16世紀以降、突如としてインド洋に現れたポルトガル勢力によって壊滅的な打撃を受け、その繁栄を喪失した。アフリカの遅れは16世紀に始まっており、ヴァスコ＝ダ＝ガマの「インド航路発見」を契機としている。ヨーロッパ勢力は、この事件以後、ポルトガル、スペイン、オランダ、イギリス、フランス等の勢力が抗争を繰り返しながら、一貫してアフリカからインドへ、そしてアジアへとあふれ出していった。

マリンデイの海岸に白い小さな塔が立っている。まるで灯台を小型に縮めたような形だ。そこに「Cross Bearing the arms of Portugal put up by Vasco da Gama in January 1499」と書いてあった。1499年1月にヴァスコ＝ダ＝ガマの一行がここに足跡を残したのだ。そして、アフロアラビアの遺跡「ゲデイー」の傍には、「ヴァスコ＝ダ＝ガマのインド航路 (Vasco da Gama of the sea route to India)」と書かれた多数のパネルを展示している館があった。私は飽かずこのパネルに魅せられた。

ポルトガルの胎動：

ポルトガル王室は、15世紀後半から、『大航海時代』の扉を開けようとしていた。しかし、大航海時代の扉は容易に開かれるものではなかった。資本、船舶建造技術、航海技術が蓄積されなければならなかった。加えて、目的を正当化する理論とキリスト教世界からの支持がなければ出来なかった。ポルトガルをイスラムの支配から独立させた力は、レコンキスタ（国土回復運動）の熱い宗教的な情熱であった。イスラム勢力を駆逐するというキリスト教世界の願いを、先ずイベリア半島で実現したのはポルトガルであったから、その中心的な建国の勢力の心情は、やはり、イスラム教徒をいかに駆逐し、キリスト教の福音を広げるかにあったといっても過言ではなかろう。その勢力の頂点にたっていたポルトガル王室は、ましてや、の感があった。先ず、エンリケ航海王子（1394年から1460年）であり、その後継者であるジョアン二世（1481年から95年、在位）とその継承者D. マヌエル王の治世であった。この三人の王達の共通の願いもまたキリスト教的な情熱であった。彼等は、不思議と伝説のキリスト教国プレスター ジョン (Prester John) の存在を信ずるところがあり、しかも、アジアのその摩訶不思議なキリスト教国の軍事力を借りて、イスラム教国を東西から挟み撃ちに来るはずだという神がかり的な確信があった。しかし、もう一つその真意を剥がすと、このキリスト教国が本当に存在しさえすれば、安全な航海が保障され、イスラム商人によって独占されていたスパイス貿易を覆えせるはずであるという願いがあった。その野望を実現する事が、ポルトガル王室の一貫した政策であった。

ポルトガル海洋帝国の建設：

海洋帝国の建設は、「ガマとカヴラルによって始められ、アルメイダによって進められ、

アルプケルケの香料諸島獲得によって完成された」という。イベリア半島の小国ポルトガルが、後進のスペインと世界分割を争いながら、いち早くインド西岸に達し、ゴアを築き、マラッカ海峡を押さえ、香料諸島に進出した。一方でカブラルによるブラジル発見が南アメリカに巨大な領土を齎した。その過程を年表に沿って辿ってみたい。

- 1415年 ジョアン一世によるセウタ攻略（イスラム教徒の北アフリカの拠点）
エンリケ航海王子（ジョアン一世の第三王子）、西アフリカ沿岸航路開拓
カラペラ船の登場（3本マストに三角帆をつけた快速船）
- 1431年 アソーレス諸島発見
- 1445年 ヴェルデ岬諸島発見
- 1455年 ローマ教皇カリストゥス五世、インテル・ケテラ大勅書でポルトガルの西アフリカ全域、南下征服地の権益と貿易独占権を承認
- 1460年 エンリケ航海王子死去、シェラ・レオネ地方までの海岸線が明確となる
- 1469年 スペイン王国統一（カステーリャのイサベル女王とアラゴンのフェルナンド王の結婚によりカソリック両国が合併）
- 1473年 ルイ ゴンガルベス ダ カマラの北大西洋の冒険航海
- 1474年 北大西洋の探検航海として最も重要なのが、ディオゴとジョアン デ テイヴェとフェルナオ テレスの航海である
- 1479年 スペインとポルトガルの間でアルカソヴァス条約を締結、カナリア諸島を除く東大西洋の全諸島とギネー（西アフリカ）がポルトガルに帰属
- 1482年 黄金海岸にサン・ジョルジュ・ミナの城砦を完成
- 1484年 デイオゴ カオ、アフリカ西海岸に沿って冒険航海
- 1486年 フェルナオ ダルモとジョアン アフォンソ ド エストレイトの北大西洋航海
- 1487年 ジョアン二世によるプレスター・ジョンの王国の探索開始
アフォンソ デ パイヴァとペロ デ コヴィリャン、東方の経済、政治、地理的情報収集を地上の探検で実施
- 1488年 バルトロメウ・ディアス、アフリカ西海岸沿を南下し喜望峰発見
ペロ・デ・コヴィリャンが紅海からアフリカを經由しインドに到達
- 1489年 ジョアン二世、コヴィリャン報告でアフリカ南端が廻航可能と認識
- 1492年 イスラム教徒の最後の砦グラナダ王国陥落（スペインのフェルナンド王）
- 1493年 ジョアン二世、コロンブスの大西洋航海の報告を聞く
ローマ教皇アレクサンデル六世（スペインの出身）の大勅書でコロンブスの発見地でのスペインの権益を承認、更にアソーレス諸島とヴェルデ岬諸島の西100レグア（約550キロメートル）の所を南北に走る経線の西に発見される島々と陸地の領有権を承認

- 1494年 トルデシリヤスでポルトガルとスペインが会談しトルデシリヤス条約を締結。
経線をヴェルデ岬諸島の西端から370レグア（約2000キロ）まで移動
させ、その経線の西にある島々と陸地がスペイン領、東にあるものがポルト
ガル領とした（後にポルトガルがブラジルの領有権を主張する根拠となった）
- 1495年 ジョアン二世死去。D. マヌエル王即位
- 1497年 マヌエル王、ヴァスコ＝ダ＝ガマ船隊を派遣
- 1498年 ガマ船隊、インド西部マラバル海岸カリカットに到着
- 1499年 ガマ船隊、リスボンに帰還
- 1500年 ペドロ・アルヴァレス・カヴラルの船隊がインドを目指したがブラジルに漂
着（ポルトガルによるブラジル発見）
カヴラル船隊インド西部マラバル海岸に着いたが、カリカット領主と戦闘
カヴラルはインド西海岸のコチンやカナノールと香料取引を実現
コルテリアルとミゲル兄弟の北大西洋航海
- 1501年 カヴラル船隊が大量の香料を積んでリスボンに帰還し、欧州の香料市場に革
命的な影響を齎す
（リスボンがヴェネチア、アレクサンドリア、カイロ、バイルートに代わっ
て香料の仕入元になり、かつ、アントワープにも出荷した）
- 1502年 ヴアスコ＝ダ＝ガマの20隻の船隊がインドに派遣され、コチンとカナノ
ールに商館を建設
- 1503年 アフォンソ・デ・アルプケルケがコチンに砦を建設
- 1505年 フランシスコ・デ・アルメイダが初代インド副王となり、15000人の兵
力と22隻の船団をもって、アフリカ東海岸のキルワ（タンザニア）に砦を
築いた。アンジェダイヴァやカナノールにも要塞を築いた
- 1508年 インド西海岸北部チャウル沖でイスラム艦隊と開戦。
- 1509年 インド、グジャラート地方のディウ沖でイスラム艦隊を破り、インド洋の制
海権を確立
- 1510年 アフォンソ・デ・アルプケルケが2代目インド副王に就任し、インド西岸の
ゴアを占領し、ポルトガルの根拠地建設を開始
- 1511年 アルプケルケ、マラッカ攻略、香料諸島（モルッカ諸島）探索
- 1512年 香料諸島の一つ、テルナテ島に到達、
- 1519年 テルナテ島に要塞を確保

海洋商人たちの狙い：

1497年から1499年にかけてのヴァスコ＝ダ＝ガマの航海は、大きな視点で見ると、バルトロメウ デイアスによって得られた海上、かつ、地理上の経験を相続し、継続したものであった。1488年に、デイアスは、西方から、後に「喜望峰（the Cape of Good

Hope) 」と改名された「嵐の岬 (The Cape of Storm) 」を回った第一走者であった。

ポルトガルのアビス朝の始祖ドン・ペドロ (D.Pedro- 1439~49、後のジョアン一世) の摂政時代に始まり、基本的にはジョアン二世 (D.Joao II 1481-95) の治世の間に展開された首尾一貫した且つ継続的な『南進政策』は、ジョアン二世の下で、著された『インドへの計画 (Plan for the Indies) 』のなかで、最終的に明示された。この「南進政策」の後ろには海洋商人たちが存在したとされる。

アビス朝に先立つブルゴーニュ朝最後の王フェルナンド一世の時、カステイレーリャ出身の王妃の企みに反発した海洋商人たちは、王家の血を引くアビス騎士団団長のドン・ペドロを国王に選定、これに干渉しようとしてやってきたカステイレーリャ軍をアルジェバロータの戦いで破った。これがアビス朝の始まりであり、以降、ジョアン一世は、常に海洋商人たちの後ろ盾とその意向を汲んで行動することになった。

その海洋商人とはジェノヴァの商人たちであった。ジェノヴァという国は、台頭するオスマン帝国から地中海商圏への強い圧力を受け、またヴェネツィアとの抗争にも敗れ、内紛に悩み、弱体化し、政治的従属国の運命にあったため、その資本と技術は、イベリア半島のカソリック教国 (ポルトガルとスペイン) のうち、先ずポルトガルに流れ込み、14世紀前半から経済的にも技術的にも影響を与え始めていた。ポルトガルという国名をみると『ポルト=港』から始まったことをうかがわせる。そして、大西洋に面しており、海洋民族でもあった。

国内のイスラム教徒を13世紀中に撃退したポルトガルは、14世紀後半から国王や貴族、大商人たちが船を所有し、貿易に投資するようになっていた。この海洋商人たちは、蓄財をするだけでなく王族を動かす、更にその商圏を拡大しようとした。王権を支配するための投資も惜しまなかった。冒険家たちやそれを支持する王家は、海洋商人たちの意向を汲みながら、資金を調達し、船隊を組むことになった。無事に帰還できる保証のない船隊の乗組員にも大きな見返りを約束しなければならなかった。

どの冒険家たちの事業の出資者も、王家の裏にいた海洋商人たちであり、彼等は借用資金の返済を迫り、発見の利益の分配を要求した。その見返りは、様々な社会的特権であり、ある時は、徴税権の譲渡を受けることもあったという。海洋商人たちは、王権を表面に立てながら、『大航海時代』の世界分割の裏の利益享受者として、巧みな活動をしていた。真の、かつ、最終の利益の享受者は、冒険に対する投資を実行できた「海洋商人たち」だったにちがいない。

ポルトガル宮廷内の派閥闘争：

バウトロメウ デイアスの航海とヴァスコ＝ダ＝ガマの航海の間には、約10年間の間隔がある。この間隔は、ポルトガル王室の政策機密のためであり、航海の準備に使われたという説がある。他にも、ジョアン二世の病が長引いたから、あるいは、彼の政治的力不足、または、彼の弱さに起因するという説がある。しかし、事実を見ると、彼は2度クリストファー・コロンブスのプロジェクトを断っている。この遅れの原因は、宮廷内部やポルトガル社会にあった『南進政策』に対する反対派の存在が原因であったとするのが最も有力な説である。

15世紀後半から16世紀にかけてのポルトガルの政治には、『2大派閥』が存在していた。彼等は集団を組み、宮廷社会で旗幟鮮明であり、王室の拡大主義政策に対して色々な角度から反対の姿勢を取っていた。あるグループは、モロッコでの軍事的拡大を後押ししていたし、グラナダのムスリム王国を再征服する考え方に傾倒していた。D.マヌエル王の体制の初年度に、このグループは公然とエルサレムへの全ての道、北アフリカの征服を唱道した。一方、D.マヌエル王の派閥に近いのだが、商業主義と南部の地理的な開拓と「東方(Orient)」への道、そしてインドの地にあるという伝説の「東方のキリスト教の王国」、プレスター＝ジョンの王国、の探索までを結合したひとつの「拡大主義政策」を支持した者たちがいた。ポルトガルとプレスター＝ジョンの同盟は、豊かなアジア市場への門を開くだろうし、更に、近隣や中東のイスラム勢力に対して主要な反撃を組む軍事的同盟となるだろうという見方だった。これを「東方派」といった。

D.マヌエル王の治世の始めの頃、貴族たちの嫡子ではない2番目以下の息子たちが、モロッコ主義者(Moroccan)を支持し、王室を支配していた。しかし、D.マヌエル王の覇気で、『東方派』が、リスボンにあるイタリアの商会、特にジェノバとフィレンツェの財政的支援を取り付けて、優位に立ち、ポルトガルの拡張主義政策によって追尾され、国の方針として確立する事に成功した。

この勝利は東方への進出の最後の障碍を取り除いた。それと同時に、インドのプレスター＝ジョンを探すという考えと東方のスパイスが齎す豊かな貿易を手に入れるという考えが一体化し、運動を鼓舞した。即ち、「クリスチャンとスパイスの探索」ということだった。『南進政策』は、遂に1497年にヴァスコ＝ダ＝ガマの航海をもって具体化されることになった。

キリスト教世界の調整：

ポルトガルの政策を実行するには、ヨーロッパのキリスト教世界の外交的支援(Christian Europe's diplomatic circle)を取り付けなければならなかった。その意味で1479年9月4

日のアルカコヴァス・タレド条約 (Alcacovas/Taledo-1479～81) と1494年6月7日のトルデシリヤス条約 (Tordesillas-1494)の2つの条約は大きな意味をもった。特にローマ教皇アレクサンデル6世はスペインの出身であったことからスペインに有利な『経線を引いた』大勅書をだしたといわれており、ポルトガルはスペインに対する不満を深めていた。両条約は両国の確執を整理する過程でもあり、両国はローマ教皇を共に仰ぐ立場にあった。「イベリア半島のカソリック両国」と称されたポルトガルとスペインは、その海洋船隊を派遣するにあたり、そこから出る領有権や権益を予めカソリック教の大本山であるローマ法王庁に承認してもらっておく必要があった。この辺も極めて商人的な感覚が働いていたことになる。そして、このような外交的な調整をすることなしに、『大航海時代』の幕は開かれなかったのだ。

キリスト教世界にとって、イスラム諸国の勢力に押し込められ、スパイスを高値で買わされていたという事情も勿論あるが、レコンキスタ (国土回復運動) で生まれたポルトガル人たちの気分には、宗教的に純粹なところがあつたようだ。彼らは、東方への航海で、クリスチャン=インドを発見する、否、発見したいという強い願いがあり、この思いがD. マヌエル王の計画を更に完璧なものとした。もし、ヴァスコ=ダ=ガマたちがインドの西岸の国、カリカットで合意に達する事が出来なかったならば、間違いなく、インドにあると信じて疑わなかったクリスチャンの王国を目指して、更に航海を続け、東南アジアのマラッカに達したかもしれないのだ。結局、カリカットで同盟が簡単に成立し、西のクリスチャン (ポルトガル) と東のクリスチャン (クリスチャンと誤解されたヒンズー教国カリカット) の間で、スパイスの自由な取引が開始される事になったのだが。

ゲデイーにある「ヴァスコ=ダ=ガマのパネル」には次の記載があつた：

“1500年にペドロ アルバレス カヴラルの指導下で第二の船隊が発せられた時に、マヌエル王はカリカットのサモリム (王) に手紙を書き、『忠実なる兄弟へ』と呼びかけた。そして、「主なる神よ。感謝します。インドにクリスチャンが存在したと知らされました。私の望みとは、王よ、あなたとお話しすることですし、共に発展する事ですし、愛の偉大な証を見ることです。クリスチャンの王たちがあまねく行なっている如く、私たちは兄弟になるのです。神がこの素晴らしい航海を単にあなたと私の取引や儲けの為だけでなく、私たちがなさなければならない魂の救済の為に命じになったことは、全く明白な真実なのです。もし、聖なるクリスチャンの忠実さをもって献身的な奉仕を実現すれば、世界どころか宇宙にも通じるものとなるでしょう。あなたの国が世界のどこにあるとも、いまや、この航海を通じて開かれ、自由となったのです。それが偉大なる神のご意志なのです」と結んでいる。

(この記載には、D. マヌエル王がガマの報告をうけても尚、拭いきれなかった「東のク

リスチャン王国」に対する一抹の不安、又は、疑念を感じ取ることができる。)

(第十六編に続く)

参考資料：

- ① ライフ人間世界史 15 Great Ages of Man 「アフリカ African Kingdoms」(原著 バジール・デヴィッドソン、編集 タイム ライフ ブックス編集部)
- ② 黄金郷に憑かれた人々 増田義郎 本放送出版協会 刊